

通り挨拶があった。

4年間理事長を務め、大学、気象庁以外の人達も含めた開かれた学会を目指したが、必ずしも十分成果が得られなかったのではないかと反省している。その中で、合格者数2,000名を超えた「気象予報士」等を対象に講習会を開くことになったのは喜ばしい。もう一つは、プロの研究者を対象として、学会活動を活性化することを目指して、大会のあり方を見直し、昨年の春季大会より専門分科会とポスター・セッションを中心とする形態を開始した。この評価には今しばらく時間がかかるものと見られるが、会員間で密な議論を起すという意味では、ま

だ必ずしも十分な成果が得られていないと思われる。

賞のあり方については、推薦数を増やすため、受付を通年としたが、まだ関係者に徹底していないものと見られる。

国際測地学地球物理学連合 (IUGG) の2003年大会の招致、地球惑星科学関連学会合同大会など、関連分野の学会との連絡を強めるための試みを進めている。このように多くの問題を少しずつ手がけてきたが、これらの活動を学会の目的である気象の研究を深めることにいかに結びつけるか、今後さらに検討を進めていただきたい。

1998年度山本・正野論文賞の受賞者決まる

受賞者: 堀之内 武 (ワシントン大学大気科学教室)

対象論文: Wave-mean flow interaction associated with a QBO-like oscillation simulated in a simplified GCM. (with S. Yoden)

J. Atmos. Sci., 55, 1998, 502-526.

選定理由: 赤道成層圏の東西風準2年周期振動(QBO)は、1961年の発見以来、大気力学の中心問題のひとつとして、理論的・観測的に多くの研究が行われてきているが、そのメカニズムの本質である各種赤道波動の精確な取り扱いが依然として不完全であったため、大循環モデルによる再現とその定量的解析が強く要請されて来た。

堀之内会員は、1996、1997年の気象集誌に発表した2編の論文で積雲対流加熱による波動の励起とその伝播特性を詳細に調べた後、本論文において、簡略化された大循環モデルの1400日間長期積分を行ない、QBOと原理的に同じ振動現象を再現することに成功しただけでなく、波動-平均流相互作用に関与する各種赤道波の力学を定量的に詳しく解析しQBOに果たす役割を明らかにした。

すなわち、全波数42で切断したスペクトルモデル

で成層圏の鉛直分解能を700 mとし、積雲対流を励起熱源とする短鉛直波長擾乱を表現可能とした。その結果、卓越するのは等価深度が約200 mと40-100 mの重力波であり、QBOに関与する運動量輸送の大半が赤道対称の基底モード(西風運動量はケルビン波、東風運動量は $n=1$ の重力波)によって行われていることが明らかにされた。同会員はさらに、本論文において、波動に伴う運動量フラックスの中緯度への伝播や全球ノーマルモード5日波のQBO位相依存性をも論じ、中層大気力学への重要な示唆を与えている。

堀之内会員によるこれらの詳細な力学解析は世界で最初であり、大循環数値実験による赤道大気力学研究に関し現在の国際レベルの最先端の仕事であると高く評価できる。

この論文の優秀度と完成度の高さはすでに国際的に認められ、堀之内会員がSPARC/QBO Study Groupのメンバーに指名されている大きな理由のひとつとなっている。

以上の理由から、日本気象学会は堀之内 武会員に今年度の山本・正野論文賞を贈るものである。